

## 明治維新时期におけるフランスからの男子服意匠の導入の歴史

### The Introductory History of Men's Clothes Design from France in the Meiji Restoration

中村 茂<sup>\*1+</sup>, 徳山 孝子<sup>\*1+</sup>, 笹崎 綾野<sup>\*1+</sup>, 藤田 恵子<sup>\*2+</sup>, 森田 登代子<sup>\*3+</sup>

Shigeru Nakamura<sup>\*1+</sup>, Takako Tokuyama<sup>\*1+</sup>, Ayano Sasazaki<sup>\*1+</sup>, Keiko Fujita<sup>\*2+</sup> and Toyoko Morita<sup>\*3+</sup>

\*1 神戸松蔭女子学院大学 人間科学部 神戸市灘区篠原伯母野山町 1-2-1

Faculty of Human Science, Kobe Shoin Women's University

1-2-1 Shinoharaobanoyama, Nada-ku, Kobe, Japan

\*2 東京家政学院大学 現代生活学部

Faculty of Modern Human Life, Tokyo Kasei Gakuin University

\*3 桃山学院大学 国際教養学部

Faculty of International Studies and Liberal Arts, St. Andrew's University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Cultures,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : This research aims to investigate the introductory history of men's clothes design from France in the Meiji Restoration. We researched actual progress of interaction between Japan and France, and introductory process of men's clothes design, referring materials from Japan of AICP\*. And we collected related information to the photographs of Tokugawa Yoshinobu and westernization of dress for the Meiji Emperor. The findings were obtained about design of the military uniform of Yoshinobu and the full dress of Emperor Meiji, from the investigation in the Musée de l'Armée and museums in Paris.

**要旨** 本研究は我が国の洋装文化形成の最初期において、礼服・軍服などの男子服意匠の導入に大きな影響を与えた幕末から維新时期にかけての日仏間の交流の実態と意義を明らかにすることを目的とする。そのため、パリの服飾専門学校、AICP 校\*に現存する日本由来の資料を手掛かりに、幕末の将軍徳川慶喜と明治天皇の洋装に関連する資料を調査・収集し、日仏関係者による交流の具体的経緯と男子服意匠の導入経過の解明を目指した。その結果、軍事博物館(パリ)などの調査から、ナポレオンⅢ世から寄贈された慶喜の軍服、明治天皇の礼服の意匠、慶喜の実弟昭武と関わるパリのテーラーなどに関する事実が明らかになった。\* Académie Internationale de Coupe de Paris

---

\*1) s-naka@shoin.ac.jp

## 配当決定額

平成 23 年度	1,180,000 円
平成 24 年度	1,200,000 円
合計	2,380,000 円

## 研究目的

明治維新时期は封建社会から近代社会へという急激な変化を遂げた時期であり、我が国の歴史上の転換期でも最も重要な時代である。そのため、国際関係はもとより、政治・経済・社会をはじめとする多様な分野で厚い学術研究の蓄積が見られる。ところが、「洋装化」自体の研究は他分野に比べればその歴史的重要性はほとんど顧みられなかった。また、明治期の服飾史研究では礼服・軍服・制服などの意匠の変遷や、それらの服制の歴史などの先行研究にいくつかの成果が存在するものの、「洋装化」の進展に不可欠な役割を果たした諸外国からの支援・交流の実態に着目する研究はほとんど見られない。

一方、本研究は、1830年創立の歴史と伝統をもつパリの服飾技術専門学校、AICP校校長J・P・ヴォークレー氏より、日本由来の注文書や絵型などの同校の資料の存在を知らされたことをきっかけとしている。それらの資料は明治期の男子服の「洋装化」がフランスからの支援で始まったことを裏付ける貴重な証拠である。そこで、本研究は我が国の洋装文化形成の最初期において、礼服・軍服などの男子服意匠の導入に大きな影響を与えた幕末から維新时期にかけての日仏間の交流の実態と意義を明らかにすることを目的とした。

## 研究方法

本研究では順次拡張していく同時期の「洋装化」の対象を限定するため、特に男子服意匠におけるその具体的・象徴的事例として、

- 1) 写真が現存する徳川慶喜の洋装姿(ナポレオンⅢ世から贈呈されたものとされる)
- 2) 国民に新時代を印象づけた明治天皇の御服(AICP校に関連する意匠の絵型が現存する)

を採り上げ、その歴史的経緯とそこに関わった日仏関係者の具体的動向および、その意匠や被服構成、制作技術の導入の実態を文献、服飾関係および外交文書の一次資料の調査収集とその分析により明らかにする。そのため、国内の図書館、史料館、博物館はもとより、AICP校をはじめとするフランスの関係博物館などの資料調査および聞き取り調査を実施する。また、文化学園服飾博物館に現存する明治期の礼服・軍服の撮影を行う。

## 研究の実施計画

### 【平成 23 年度】

- 1) 写真が現存する幕府最後の 15 代将軍徳川慶喜の洋装姿

徳川幕府最後の 15 代将軍徳川慶喜の洋装姿の写真は複数枚現存しているが、その礼服・軍服はナポレオンⅢ世から、フランスの軍事顧問団を通じて贈呈されたものであり、幕府の近代化を目指す慶喜とそれを支援しようとした当時の仏公使レオン・ロッシュとの友好的な関係がその洋装写真を可能にしているものと考えられる。そこで、徳川慶喜とロッシュの当時の動向を示す記録文書から洋装写真に至る経緯を確認する一方、写真資料に関しては、慶喜の実弟でフランスにも留学した徳川昭武の歴史資料を保存する戸定歴史館(千葉県松戸市)に参考資料・情報が所蔵されており、同館における調査によって慶

喜が着用した礼服などの実物資料の所在を辿るとともに、その意匠の分析を目指す。

## 2) 国民にその服装を通じて新時代を印象づけた明治天皇の御服

幕末・明治維新を経て、徳川幕府が崩壊し天皇を中心とした新政府による中央集権体制、藩閥政治へと時代が変わり、男子の礼服を洋服とする服制が定められるとともに明治天皇の御召物も御正服を着用するようになる。明治6年内田九一撮影の明治天皇の礼服姿は、日本の洋装化への萌芽期の礼服として注目される。日本政府が当時の宮内省がフランスに発注したと推察され、それを裏付ける注文書などの文書史料が日本に残されているはずであり、その検証を行う。

日本側の文書としては、幕末外国関係文書を中心に国立国会図書館デジタルアーカイブ、内閣文庫、東京大学史料編纂所資料、外務省の大日本外交文書などを参考にしながら、日本側に存在する注文書の確認までを目指す。

## 3) 文化学園服飾博物館所蔵の大礼服の意匠・構成

同博物館に所蔵されている大礼服の内、最も古いものとして、明治19年制定の文官大礼服(加藤高明着用)が挙げられる。また明治天皇が礼服以外で着用されたフロックコートも所蔵されているので、それらの現物の詳細を写真撮影し、意匠・構成を分析することで、その縫製技術を含めてフランスの影響を確認する。

### 【平成24年度】

#### 1) 写真が現存する幕府最後の15代将軍徳川慶喜の洋装姿

徳川慶喜の洋装姿の写真に見られる軍服はナポレオンⅢ世から贈呈されたとされているが、その事実を示す幕府の外交資料、及び軍服の現物は所在が不明であり、その調査を継続すると共に、フランス側の外交資料の調査を進める。軍服の意匠についてはナポレオンⅢ世の肖像画の軍服と類似しているため、その詳細について軍事博物館(パリ)における調査を行う。また、徳川慶喜の洋装に関わると推測される私的な外交顧問であるフランス人陸軍少佐の存在についても調査する。

#### 2) 国民にその服装を通じて新時代を印象づけた明治天皇の御服

日本政府が当時の宮内省がフランスに発注したことを示す注文書などの史料が見つからず、その検証を継続する。日本側の文書としては、幕末外国関係文書を中心に国立国会図書館デジタルアーカイブ、宮内庁書陵部史料、外務省の大日本外交文書などを参考にしながら、日本側に存在する注文書の確認を目指す。AICP校における資料には、天皇の軍服の絵型が残っており、それらの経緯・関係者・時期などについて特定を進める。

また、文化学園服飾博物館で撮影したフロックコート以外にも明治天皇着用 of フロックコートの現物が見つかったので、それらの意匠・縫製技術の比較とフランスからの影響に関して検証する。

### 【文献・資料調査訪問先】

23年度:AICP校、軍事博物館、パリ市立史料館、国立古文書博物館、  
宮内庁書陵部、日仏会館図書館、松戸市戸定歴史館、横浜開港資料館、  
明治神宮宝物殿、靖国神社靖国偕行文庫、  
東京大学総合図書館、京都大学人文科学研究所図書室、神戸大学人文科学図書館  
国立国会図書館、同関西館、京都府立図書館、同総合資料館  
文化学園服飾博物館

24年度:AICP校、軍事博物館、パリ市立史料館、外交文書館、国防省歴史センター、

ガリエラ美術館(モード衣装美術館)、装飾芸術図書館、フォルネ図書館  
 宮内庁書陵部、日仏会館図書館、松戸市戸定歴史館、横浜開港資料館、  
 東京大学総合図書館、京都大学人文科学研究所図書室、  
 国立国会図書館関西館、京都府立図書館、同総合資料館  
 文化学園服飾博物館

## 研究の成果

### AICP 校( Académie Internationale de Coupe de Paris)に残されている資料の検証

AICP 校には明治期の日本との関係を示す、天皇、大使等の礼服の絵型・写真、装飾図案の原画、鉤見本、日本大使館からの注文書、勲章のスケッチ、伊藤博文に関する新聞(or 雑誌)記事の切り抜きなど多様な資料が現存し、明治期の男子服意匠に関わる日仏の交流を示す歴史資料であることは確認できたが、ほとんどが未整理の状況で、年代・関係者等の基本情報の特定は今後の課題である。その一部を以下の通り紹介する。図1は、明治天皇の礼服の絵型であるが、肖像写真に写った礼服と細部で異なる(後述)。礼服の絵型として、天皇以外に提督および大使のものを図2、図3に示す。図4は大使の礼服の写真である。

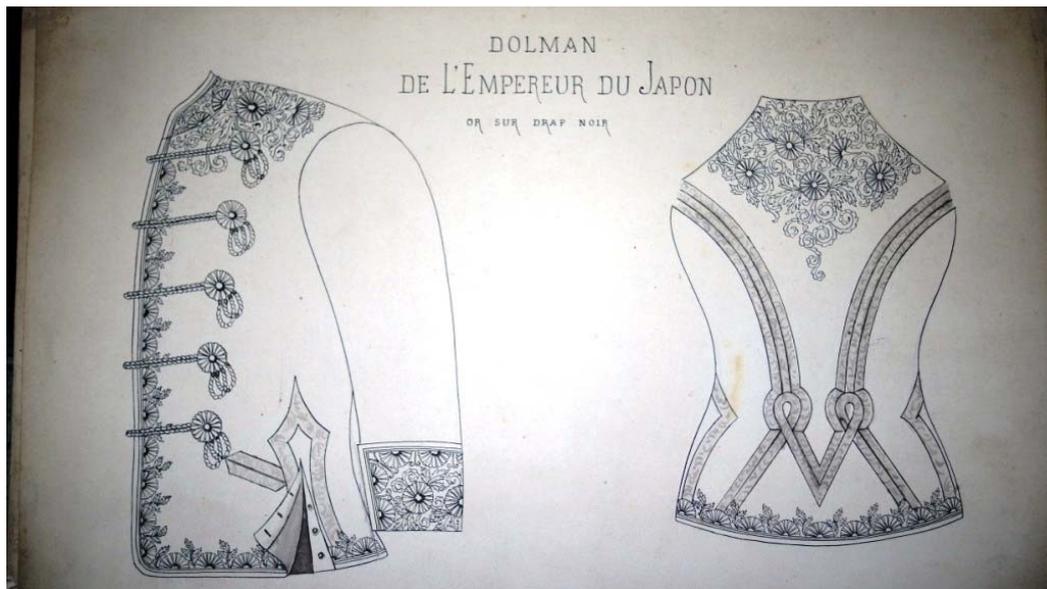


Fig. 1 Flat sketch of formal dress for the Meiji Emperor 明治天皇の礼服の絵型

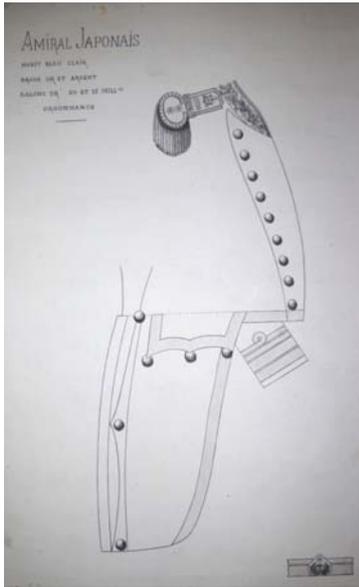


Fig. 2

Fig. 2 Flat sketch of formal dress for an Admiral



Fig. 3

Fig. 3 Flat sketch of formal dress for an Ambassador



Fig. 4

提督の礼服の絵型

大使の礼服の絵型

大使の礼服の写真

図 5 は、袖のモール装飾部分の原画であり、五七桐を日本風デザインとして採り入れている。同様に肩章の原画を図 6 に示す。



Fig. 5 Original picture of a Collar containing “Go-shichi-giri” 五七の桐を含む装飾の原画

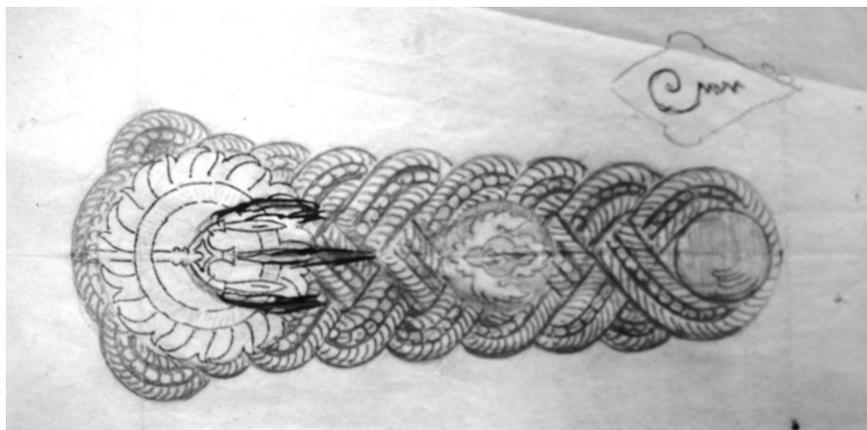


Fig. 6 Original picture of an Epaulette 肩章の原画

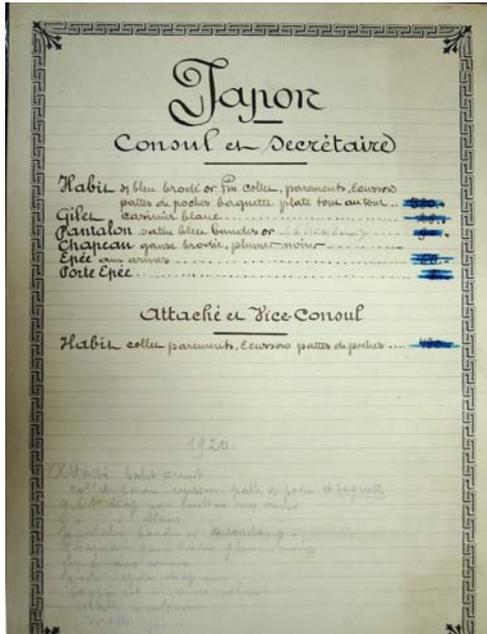


Fig.7 Order sheet from Japanese embassy  
日本大使館からの注文書

図7は、日本の領事および書記官のための礼服の注文書である。礼服には、金、青の刺繍入り、純金の襟飾り、記章、ポケットのフラップ(垂れふた)、まわりにフラットな縦の飾り(バゲット)などの仕様が記述されている。その他、ベストは白いカシミア、ズボンは青いサテン、金の縞(金の裾のへり)、帽子は刺繍された飾り紐、黒い羽根、剣は武具付き、剣差しなどの記述が見られる。

下部の空白部分には「1920」で始まる鉛筆書きと思われるメモがあり、内容は上の注文とほぼ同様であるが、素材の違いなども見られる。西暦1920年は大正9年であるが、恐らく、同様の礼服に関する明治期の注文書を参照しているものと推察される。

徳川幕府最後の将軍徳川慶喜はフランスからの援助を受けて幕政改革を行った。その密接な関係によりナポレオン三世からの贈呈とされる軍服で洋装した写真が複数現存しているが、撮影日時・場所・撮影者、現物の存在、贈呈の経緯、関係者、国内製かフランス製か等の基本的事実については未解明である。慶喜の洋装写真に関しては松戸市の戸定歴史館(実弟徳川昭武が後半生を過ごした邸宅に隣接し、二人の遺品を展示する)による「将軍のフォトグラフィー」展[1]が、後半生で自ら撮影し続けた写真とともにその経緯を解説している。図8・9は同歴史館の「最後の家令 —徳川慶喜家—」展の図録[2]掲載の写真である。慶喜の肖像写真には他にもナポレオン三世から贈られたアラビア馬に跨った洋装写真や、征夷大將軍としての正装(衣冠)のものなどが複数残されているが、あたかも散髪したかのように見える洋装写真からは西洋を模範とした強い近代化への意志が感じられる。



Fig.8



Fig.9

Fig.8・9 Tokugawa Yoshinobu in French military uniform  
徳川慶喜の洋装写真 慶応年間 松戸市戸定歴史館蔵



Fig.10 Portrait of the Napoleon III  
ナポレオン三世の肖像画

軍事博物館 (Hôtel des Invalides Musée de l'Armée) の Voinot 氏によれば、慶喜の軍服はナポレオン三世の肖像画(図 10:軍事博物館蔵)の軍服とほぼ一致しており、その意匠は当時の元帥または将軍用で、“habit de petite tenue de général ou maréchal”と呼ばれ 1850 年から 1880 年の間に用いられた。また当時は軍服を他国の高官に寄贈する慣習があった。

意匠に関しては、上着は黒またはブルー、ズボンは白または赤、付属品名称、図9の上着の長い裾はフランス風などの情報が明らかになった。また慶喜の体型に合わせた軍服を国内で調製したものか、フランス側で誂えたものかは明確ではなかった。

同館図書館にはこうした軍服あるいは礼服の服制を記述した文書が所蔵されているが、訪問時には工事中のため確認できなかった。

### 徳川昭武の洋装とテーラーS・ブーシェ (Bouché)

徳川慶喜の実弟、昭武は将軍の名代として 1867 年にパリ万博に派遣された後、滞在中に洋装しており、使節団の資料の中にその仕立て代の領収書が残っている。そのテーラーS・ブーシェ (S. Bouché) の店舗の所在が確認できたが、他の日本人顧客や、同店で研修したとされる日本人テーラーとの関係の詳細は今後の課題である。

昭武を代表とするパリ万国博覧会参加使節団に参加した田中芳雄が残した資料「外国拵拾帖」[3]、「多識帖」[4]には、パリ万博の通行証をはじめ、リヴォリー街の洋装店「ブーシェ」の領収書(図 11)、さらにはホテル、レストランでの領収書等、滞在中の生活を窺い知ることのできる資料が多数みられた。ブーシェの領収書の内容は、1867 年 9 月 5 日、Rue de Rivoli, 138<リヴォリー通り 138>、Au Coin de la Rue Roule <Roule 通りの角>、テーラー、70 フラン、ズボン、35 フラン、ベスト(チョッキ)、18 フラン、合計 123 フランと記載されていた。「外国拵拾帖」の中には、同店のショップカードも残されていた(図 12)。

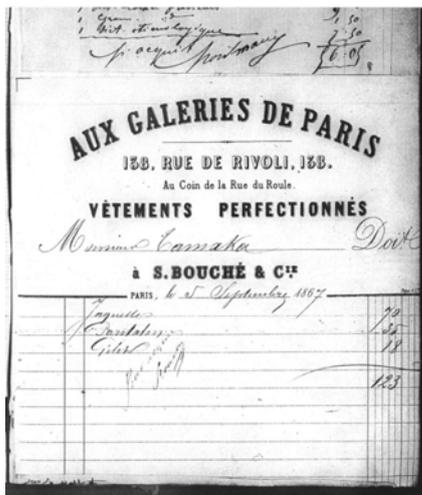


Fig.11 Receipt of Taylor S. Bouché  
テーラーブーシェの領収書



Fig.12 Shop Card of Taylor S. Bouché  
テーラーブーシェのショップカード

次に同店は 1867 年当時に実在していたのかをパリ市立史料館にて確認した。図 13 は、1867 年発行の“Diddot-Bottin”商業取引記録であり、職名仕立て職人として S. Bouché が記され、リヴォリー通りとイタリアン大通りの 2 店舗を持ち、店名は AUX GALERIES DE PARIS であることが新たにわかった。

BOU	BOU	BOU
rier-mécanicien, Jean-Lantier,	Bouché aîné (Rey aîné, success.), <i>fabr. de poterie d'étain</i> , Beaubourg, 30.	Boucher-Lemaistre (Roussel-Boucher seur), <i>papetier</i> , N <sup>o</sup> -St-Merri, 29.
ôt d'allumettes-bougies, Tré-	Bouché (M <sup>me</sup> ), <i>reperceuse</i> , Enfants-Rouges, 8.	Boucher-Lormeau, <i>opticien</i> , Renard-
rentier, Mogador, 8.	Bouché (Théod.), <i>serrurier</i> , avenue du Cimi-	veur, 6.
er, Grande-Rue-Passy, 53.	Bouché, <i>serrurier</i> , Thouin, 4.	Boucher-Mazet, <i>peintre en bâtiment</i> :
, <i>café restaurant</i> , avenue de	Bouché, <i>tourneur sur métaux</i> , Roquette, 440.	cors, La Rochefoucault, 46.
venue de Ségur, 1, et place Vau-	Bouché (S.) et C <sup>ie</sup> , <i>vêtements confectionnés</i> ,	Boucher-St-Agnan, <i>architecte</i> , St-Laz
s, <i>bijoutiers en doré</i> , N.-D.-de-	Bouché (S.-L.), <i>vins et limonadier</i> , Charenton,	Boucherat (Ch.), <i>dessinateur (impr</i>
, <i>commission.</i> , Petites-Ecuries,	24.	Jeûneurs, 5.
Arcade, 67.	Bouché (P.), <i>vins</i> , St-Sauveur, 24.	Boucherat, <i>mercerie et bonneterie</i> , Ter
t, <i>plumes pour parures</i> , N.-	Bouché et Pigneau, <i>fabr. de voitures</i> , Chabrol,	Boucherat (Ch.), <i>papiers-marbrés</i> , 3
, 11.	26.	rency, 49.
in, <i>mercerie, articles de Pa-</i>	Bouhel (J.), <i>apprêteur de châles</i> , Faub.-St-	Boucherat-Roger, <i>fabr. et location de</i>
121.	Denis, 14.	à bras, Petite-Rue-St-Pierre-Amelot,
	Bouchéné-Lefer 桑, <i>avocat cour impériale</i> ,	Bouchère (Ch.), <i>ébéniste</i> , St-Etienne
	boul. Montnarnasse, 51.	Nouvelle, 15.
		Bouchereaux (P.), <i>menuisier</i> , St-M

Fig.13 “Diddot-Bottin” 1867 Commercial Almanac  
1867 年発行の商業取引記録 パリ市立史料館蔵

「日本洋服史」[5]には、明治 13 年、パリの「エス・ブーシェー紳士服店」へ修業に出かけた大谷金次郎について、仕立てた洋服を見た店主が「これ以上パリで洋服調製技術を修業する必要はない」という技術鑑定書を出すほど技術は秀れていたとの記述がある。明治期の日本人顧客が洋服を購入するだけでなく、日本人テーラーが仕立て技術を習得するためにフランスへ渡り、直接技術を学んだ店でもあり、ブーシェは洋服技術の発祥経路の一つとして重要な役割を果たしたものと考えられる。

#### 明治天皇の軍服と AICP 校所蔵の絵型との比較



Fig.14 Portrait of the Emperor Meiji  
明治天皇の肖像写真

「明治天皇記」[6]明治 6 年 10 月 8 日の条には、「是の日、宮城内写真場に於て、新製の軍服を著して撮影あらせらる」とあり、礼服(軍服)を着用したことがわかる。この年から新暦が採用され、天皇は 3 月に御断髪になったという記録を挙げている。この明治天皇の写真(図 14)は今でも様々な出版物で見ることができる。

この軍服については、明治 6 年の明治天皇御料(御正服、御肩章、御正帽)として明治神宮に保存されていること、明治 6 年 6 月 3 日欧州各国皇帝の服制を斟酌して制定された軍服の正服であったことを確認した[7]。軍服は、AICP 校に所蔵されている軍服の絵型(図 1)と類似していて、そこには“DOLAMN DE L'EMPEREUR DE JAPON”と記されている。絵型は、首から後ろ肩にかけて菊と唐草文様、前身頃から腰回りも全部菊と唐草文様で縁

取り、両脇にスリット、肋骨胸飾りに菊花文様の5つボタンであった。

軍事博物館のJ・Voinot氏によれば、「明治天皇の軍服のデザインは、騎馬隊の毛皮付き軍服と似ていたが、日本風にアレンジされていた。また、その原形は15世紀、ハンガリーの軽騎兵のデザインと考えられる」(図15・16)。絵型は、明治天皇の肖像画の軍服と相似するが、肩章がつけられ、絵型よりも菊と唐草文様が多用され、縁取りの模様も異なっている。軍服を仕立てる際には、絵型を基にしてさらに明治天皇に相応しくデザインしたと考えられる。



Fig.15



Fig.16

#### 明治天皇の洋装化

1868年、徳川幕府が崩壊し、天皇を中心とした中央集権体制、藩閥政治へと時代が変わり、様々な分野での西洋文化の導入が始まる。明治元年1月15日元服された明治天皇の御召しものも御束帯姿から西洋式の礼服へと変化する。

Fig.15・16 PELISSE of Light Cavalryman in 15<sup>th</sup> century Hungary  
15世紀ハンガリー軽騎兵の毛皮付き軍服  
軍事博物館所蔵

「明治天皇紀」[6]明治5年5月23日の条に「大坂並びに中国・西国巡礼の途に就きたまふ、(中略)燕尾服ホック掛の正服を著御し、騎馬にて御出門あらせらる、天皇該正服を著したためへるは是れを以て始とすと云ふ」とあり、明治天皇が初めて洋服を着たことがわかる。

明治天皇は燕尾服や礼服(軍服)の他に御内儀ではフロックコートを着用されていた。「明治天皇の御日常」[8]には「御儀式や謁見の時などは御軍服をめしましたが、内閣や樞密院の会議などに臨御の時は、フロックコートのままであったかと覚えて居ります。殿下の御めしになるフロックコートは、御ズボンも黒で、縞ズボンは決して御めしになりませんでした」とある。フロックコートは私的に着用されたものであり、明治天皇のフロックコート姿の写真が現存しているかは不明だが、フロックコートの現物は、明治神宮宝物殿、文化学園服飾博物館、個人では石田原弘氏蔵など日本国内には数着所蔵されている。文化学園服飾博物館に収蔵されている明治天皇着用フロックコート、文官大礼服、軍服、石田原弘氏蔵のフロックコートなどの数点については、フランスからの意匠、製作技法への影響を検証するための資料として現物の撮影を行った。

また明治神宮宝物殿において、明治天皇御料(御フロックコート)の実物を閲覧し、「フロックコートは私的に着用し、通常の政務の際は軍服を着用された。フロックコートは最初(明治10年頃)政府高官の通常礼服として用いられたが、明治の中期以降は広く一般に普及した」との説明を確認した。

明治5年の「明治天皇紀」[6]では、西国巡幸時の詳細な天皇着用洋服の記述がみられるが、どのような過程で入手されたかは省略されており不明である。

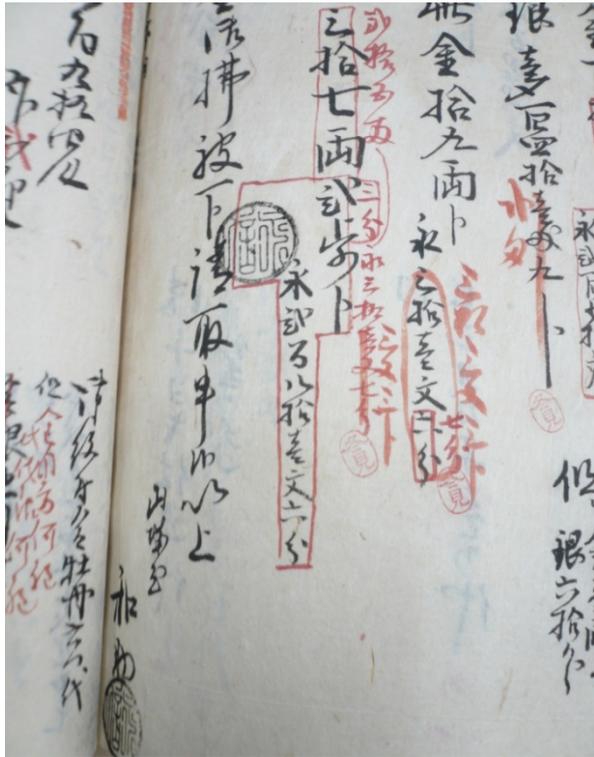


Fig.17 “Goyoudoroku” of the Emperor Meiji  
「御用度録」 明治五年

そこで宮内庁書陵部と宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵の文献を中心に、具体的には天皇一家の日常生活を記録する史料を調査した。「御用度録」[9]は、天皇一家の衣食住、つまり身の回り品購入の全項目を宮内省調度司が記録したもので、天皇一家の西洋化の受容過程や、純然たる日本風の生活基盤をも確認できる史料である。それを精査することで、肖像写真としてあまりにも有名な明治5年の写真機材道具購入の史料を見つけることができた。明治5年3月、写真家内田九一に支払った領収書(額縁、現像液など)につづき、金糸(モールかどうか不明)、白シャツ、ボタン、マントー、キャップ、ズボン、チョッキ、ジャケットの各布地代と誂えの代金が山城屋和助に支払われていたことが、その領収書から判明した(図17)。布地などはヨーロッパからの輸入品と推測されるが、仕立ては日本である。この史料から明治天皇の洋装化が明示される。

さらに明治天皇個人の着用品の記録としては、「明治天皇御料御保存御服目録」がある。これは明治天皇が着用した儀礼用衣服を網羅するものである。第三号箆笥の中には、明治5年九州巡幸時着用した燕尾服正服上衣、モール、袴(ズボン)の所載を確認した(図18)。帽子は仏蘭西陸軍形となっている。詳しくは高帽、地質黒ヘッド、仏蘭西製と記され、服飾意匠に関してはフランスからの影響は多大であったことが明らかである。「明治天皇御料御保存御服目録」からは、明治天皇は明治2年頃、既に教練用に洋服を着用したことも確認できた。乗馬の際は狩衣、直衣を著用のときもあったが、軍事教練用視察では西洋服であったことは確かであろう。

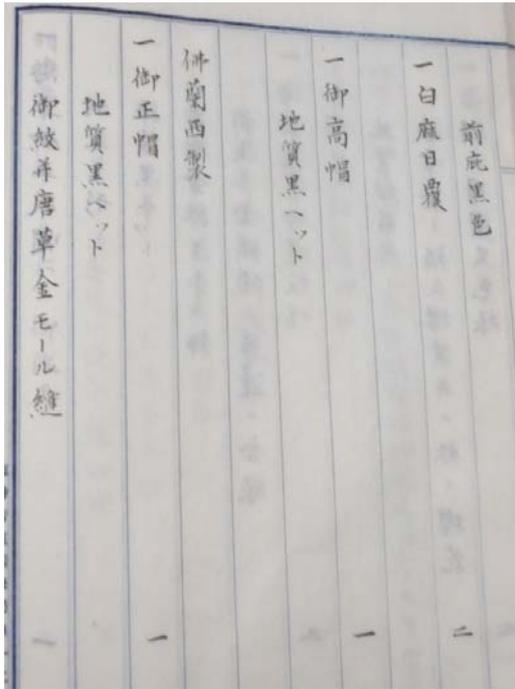


Fig.18

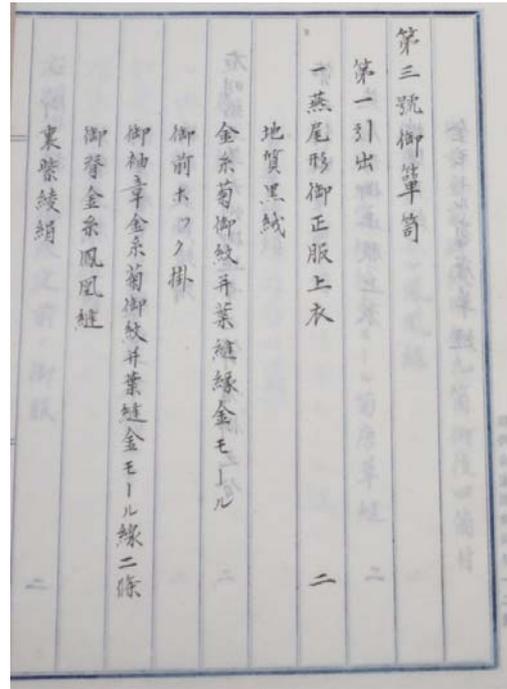


Fig.19

Fig.18・19 “Gohuku-mokuroku” of the Emperor Meiji  
「明治天皇御料御保存御服目録」

### 謝辞

本研究における AICP 校関連資料の閲覧に関しては、ご多忙にも拘わらず、同校校長 Jean-Philippe Vaclair 氏、およびマネージャー吉田和子氏に多大なご支援を頂いたことを記して感謝致します。また、軍事博物館の Julien Voinot 氏、外交公文書館の Françoise Aujogue 氏からは多くの親切な助言を頂きました。最後に、文化ファッション研究機構事務局の皆さまにも、大変お世話になり御礼申し上げます。

### 参考文献

1. 松戸市戸定歴史館：図録「将軍のフォトグラフィー」(1992)
2. 松戸市戸定歴史館：図録「最後の家令 —徳川慶喜家—」(2010)
3. 田中芳雄著：「外国摺拾帖」、1867-1876年、東京大学総合図書館蔵
4. 田中芳雄著：「多識帖」、1867-1876年、東京大学総合図書館蔵
5. 出口稔：「日本洋服史」、洋服業界記者クラブ「日本洋服史刊行委員会」(1976)
6. 宮内庁編：明治天皇記、吉川弘文館(1968~1977)
7. 明治神宮：図録「五箇條の御誓文発布百三十年記念展明治天皇の御肖像」(1998)
8. 臨時帝室編修局：「明治天皇の御日常」、新学社教友館(1976)
9. 「御用度録」、宮内庁書陵部
10. 「明治天皇御料御保存御服目録」、宮内庁書陵部